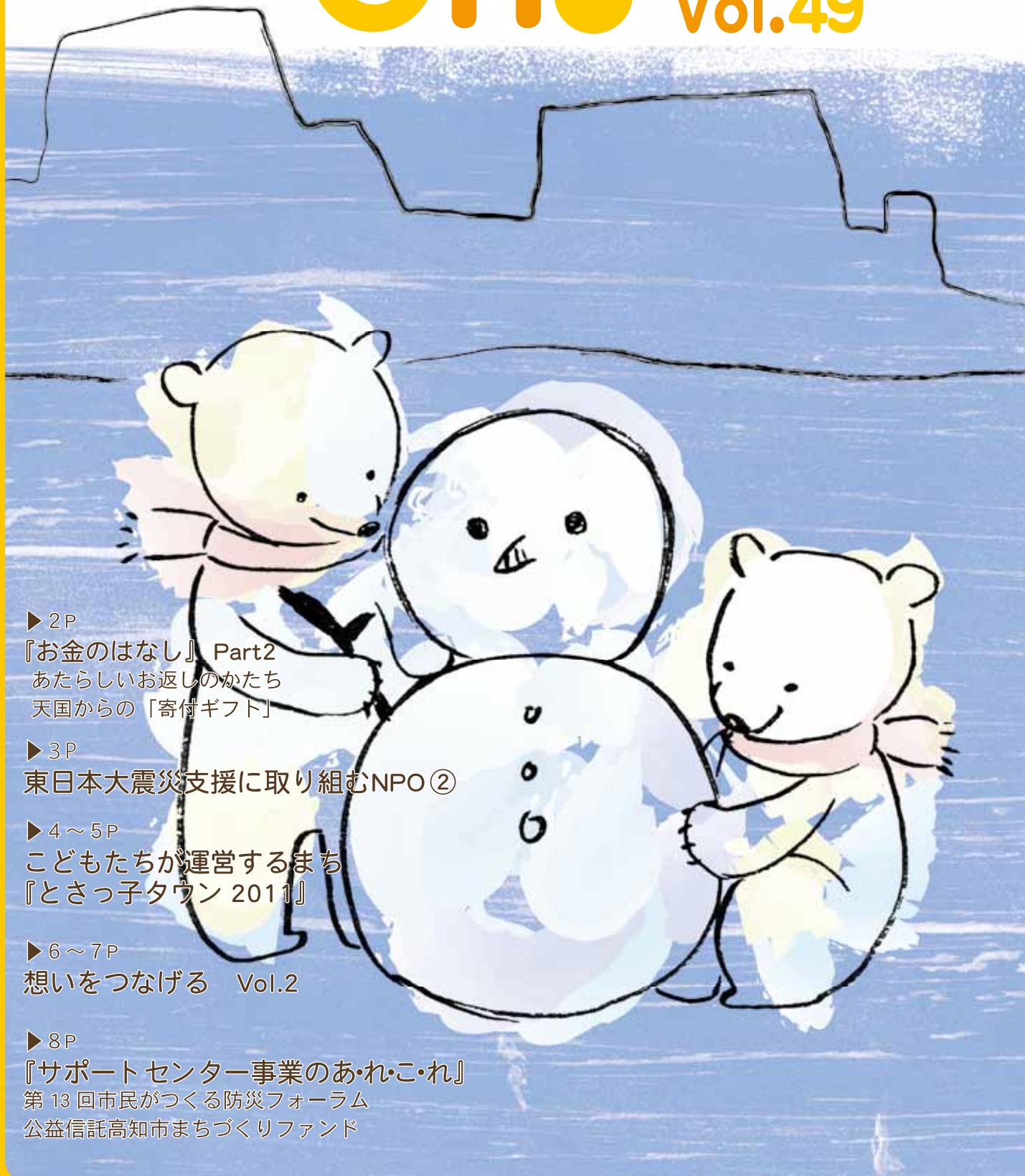


えぬひい！Oh!

2011 冬
Vol.49



► 2P

『お金のはなし』 Part2

あたらしいお返しのかたち

天国からの「寄付ギフト」

► 3P

東日本大震災支援に取り組むNPO②

► 4～5P

こどもたちが運営するまち

『とさっ子タウン 2011』

► 6～7P

想いをつなげる Vol.2

► 8P

『サポートセンター事業のあ・れ・こ・れ』

第13回市民がつくる防災フォーラム

公益信託高知市まちづくりファンド



『お金(ファンドレイジング)のはなし』Part2

あたらしいお返しかたち「天国からの『寄付ぎふと』」

この夏「天国からの『寄付ぎふと』」(以後『寄付ぎふと』)と呼ぶがスタートした。『寄付ぎふと』とは、ひとことで言うと香典をNPO等に寄付するしくみだ。故人の最後のお別れメッセージとして、社会貢献のために香典を寄付。故人や遺族の意志を汲み、故人の生涯をより社会的に意義あるものとして後世に伝えるため、NPOの活動に役立てられるのだ。

善意の循環へのチャレンジ

『寄付ぎふと』は、2010年夏、「高知流NPOのファンドレイジングを考える!」をテーマに集まつた有志たちの会議の中で、NPO高知市民会議事務局長島中氏から出された「香典返しを寄付してもらうしくみが考えられないだろうか、故人の人となりを記憶に刻むような新しいお返しを寄付文化に結びつけられないか」という提案から生まれたしくみだ。

人が亡くなると、最後のお別れに故人を偲んで人々が集まる。このとき、故人の家族への支援の思いなどをこめて供えられるのが香典。香典をもらった遺族は四十九日を以て香典返しを送る。このとき、選択肢のひとつに「社会貢献」や「社会への寄付」を加えられないだろうか?...と。以降、NPO高知市民会議と香美市に本社のあるT葬儀社のコラボによるお香典を社会に生かすプロジェクトが立ち上がり、「寄付ぎふと」が生まれ今夏スタート、現在に至っている。

高まる寄付意識

T葬儀社では今夏より、お返しメニューの一つに『寄付ぎふと』を加え紹介を開始、現在までに100件を超える喪家に紹介する中で、2件の成

立を見るに至っている。この成立件数を多いとみるか少ないとみるかはそれぞれの考え方ではあるが、筆者は順調なすべり出しとみる。ちなみに『寄付ぎふと』の使い方は『寄付ぎふと』のみ(商品なし)、と『寄付ぎふと』と商品の抱き合わせの二通りのパターンとなる。

また、『寄付ぎふと』ずばりの契約ではないが、興味を示した喪家の方が『寄付ぎふと』で紹介する団体(子育て、環境、福祉などの分野で活躍する6団体を寄付先としている)に直接出向いて寄付をするという事例や、「知っている市民活動団体へ寄付してみようかな」とgoodな反応を示す方々、『寄付ぎふと』寄付先団体に医療関係がなかつたことから、喪家の方が亡くなられた方ご本人の関係が深かつた高知大学医学部(学部、付属病院どちらかは不明)へ寄付するという事例も出てきた。

付をするという事例や、「知っている市民活動団体へ寄付してみようかな」とgoodな反応を示す方々、『寄付ぎふと』寄付先団体に医療関係がなかつたことから、喪家の方が亡くなられた方ご本人の関係が深かつた高知大学医学部(学部、付属病院どちらかは不明)へ寄付するという事例も出てきた。

さて、最後に、本プロジェクトに当初から熱い志を持って参画してくださっているT葬儀社の社風を紹介してこの頁を締めくくりたい。小見出しに記す「ここにろじ」とだ。

「ここにろじ」とは、真摯な姿勢と心を以てお客様の利益を考えた仕事を実践すること。そうすれば、必然的にお客様が求める企業として正しい成長と業績につながることとなり、かつ、社会貢献にもつながっていくのである。(※T葬儀社T代表の言葉を筆者なりに解釈)

いやはや参りました。感服です。

ついでに、T葬儀社が『寄付ぎふと』に参画した一番の理由として、「『寄付ぎふと』は、「ここにろじ」とに合致しているからだ。」とのこと。これまたうれしい限りである。

本誌の趣旨とは若干異なつてしまつたが、『寄付ぎふと』プロジェクト会議の中で筆者の心に深刻され、市民活動においても座右の銘にしたい名言であると思い、紹介した次第である。

(しみや)

『寄付ぎふと』問合せ先・特定非営利活動法人
NPO高知市民会議まで
TEL:088-820-1540



で、「社会常識からいつお返しは商品である」「お返しが商品でないことに抵抗がある」「会葬抗がある」「四十九日が過ぎる中で寄付という選択肢を考えるゆとりがない」などの声を多く聞いた。至極当然だと思う。情けないが、プロジェクトを考えると躊躇してしまうにちがいない。



東日本大震災に取り組むNPO

2

岩手県大槌町での3度の
支援を振り返る

東日本大震災では、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議のスーパーバイザーとして3月18日～26日、4月30日～5月6日、7月11日～16日の3回にわたり岩手県大槌町に赴いた。任務は災害ボランティアセンター（以下、ボラセン）支援と総合的な助言。今回が10回目の被災地支援だった。

大槌町は人口の1割近い1397名が死亡・不明。市街地は火災で焼け焦げ、停電・断水・通話不能で常に救急車が行き交っていた。ボラセンの中核となる社会福祉協議会も建物は流出し、会長・常務・総務課長の三役が死亡し機能不全に陥った。社協職員と劣悪な環境の避難所を見るたびに、「一刻も早くボラセンが必要という焦りの一方、みんなが家族・親戚・友人・同僚の誰かを失っている状況で寄り添いも必要だつた。焦りを封印し、ひたすら地元の人に寄り添い信頼を得ることだけに奔走した。派遣最終日に全国の社協職員のプロジェクト派遣がはしまり、ボラセンが立ち上がるのを見届けて大槌町を後にした。

2回目は大型連休とあってボランティア数がピークを迎える、ボラセンは若手職員が目を見張る成長を遂げていた。復旧の進む地区、手つかずの地区と明暗が分かれていた。ボラセンも同様で、私の主な任務は、ボランティアを必要としている地区にサテライトをつくること。独特的の地域性もあり簡単ではなかつたが、3月に地域のキーマン

東日本大震災では、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議のスーパーバイザーとして3月18日～26日、4月30日～5月6日、7月11日～16日の3回にわたり岩手県大槌町に赴いた。任務は災害ボランティアセンター（以下、ボラセン）支援と総合的な助言。今回が10回目の被災地支援だった。

大槌町は人口の1割近い1397名が死亡・不明。市街地は火災で焼け焦げ、停電・断水・通話不能で常に救急車が行き交っていた。ボラセンの中核となる社会福祉協議会も建物は流出し、会長・常務・総務課長の三役が死亡し機能不全に陥った。社協職員と劣悪な環境の避難所を見るたびに、「一刻も早くボラセンが必要という焦りの一方、みんなが家族・親戚・友人・同僚の誰かを失っている状況で寄り添いも必要だつた。焦りを封印し、ひたすら地元の人に寄り添い信頼を得ることだけに奔走した。派遣最終日に全国の社協職員のプロジェクト派遣がはしまり、ボラセンが立ち上がるのを見届けて大槌町を後にした。



橋げたに押し寄せた家

現在、高知では「東日本大震災支援プロジェクト」などの支援も展開している。一方で東日本大震災を教訓として、高知での取り組みに活かしていくことが、私たちが東北に贈る最大のメッセージになるのではないだろうか。

と関係を築けたことが功を奏し、サテライトを立ち上げることができた。

3回目は震災から90日が経過。街は瓦礫がなくなつた分荒涼としていたが、家屋の片づけは目途がつき、仮設住宅への入居が本格化していた。大槌町は仮設用地不足もあって、地域単位で仮設に移れず、地域がバラバラに分断されていた。孤独死を防ぐために、新たなコミュニティづくりと高齢者などの見守り活動をどう展開していくかが、ボラセンに求められていた。力仕事中心のボランティアから、精神的なケアなどきめ細かな支援へと移行する時期にきていたのだ。地元スタッフとともに、サロン活動の青写真を描いて私の支援は終了した。支援といいながら多くの学びをもらつた。

被災地支援では、人材・物資・資金など多くの社会資源が有機的かつ有効に活かされることが大切です。支援Pでは被災者の声に耳を傾けながら被災者中心・地元主体の支援となるよう、ネットワークを最大限生かして支援にあたっています。



震災 1週間後の市街地

災害ボランティア活動支援プロジェクト会議のHP
<http://www.shien-p-saigai.org/>

こどもたちが運営するまち 『とさっ子タウン 2011』

変わり始めたこどものまち 「とさっ子タウン 2011」

こどもたちが運営し社会の仕組みを学ぶ仮想のまち「とさっ子タウン2011」が、とさっ子タウン実行委員会の主催で8月27日（土）28日（日）の二日間、高知市のりょうまスタジアムで開催された。

第3回を迎えたこの事業には、小学校4年生から中学校3年生までの児童・生徒300余名が参加し、こども

たちは、36種類の職業で専門家から仕事を学んだり、自ら考えて起業して働き、稼いだ給料で食べ物を買ったりゲームをしたりして楽しんだ。

仕組みの変化

今回のとさっ子タウンでは、初の議員選挙が行われ、議会が開催された。

議会は、大学生実行委員が先導しながら、こどもたちによって運営され、まちの仕組みが話し合われた。前回までは、市長の改選の度に公約で、税金や給料が大きく変わり、財政難となつて公共的な窓口が一部閉鎖されるなど、まちの運営に混乱をきたしていたが、話し合いの結果、税率が5%から10%に引き上げられ、閉鎖されていたハ



とさっ子タウン 2011 では初めて議会が設置された

運営の変化

変化は、運営する実行委員会の中にも出始めている。複数回を経験した学生委員や高校サボーターから実行委員になった者の参加により、大人に一つひとつ聞かなくとも自らの判断で行動する実行委員が増えってきた。

しかしながら、一方で新たな委員の参加により常に当初の目的を語り継ぐ必要性が生じている。

また、制度が複雑になり、まちの仕組みに関わる新たな行動を起こすと、他の仕組みに影響を及ぼし始めた。100名の実行委員が共通認識を持ち事業を進めるための仕組みづくりも必要になってきていた。

更に、運営協力のために県外から訪れるスタッフも現

ており、今後、議会の結果をいかに目に見えるように反映させるかが課題となっている。

こどもの変化

2009年に「こどものチカラを信じよう」を合い言葉に始まった「とさっ子タウン」は、回を重ねる毎にリピーターが増え、こどもに変化が見られるようになってきた。

税金を払わずに遊び、トス（とさっ子タウンの地域通貨）を使いすぎた結果、新たに就職できなくなるこどもが現れる一方、起業でしつかり稼いだこどもは、一日900トスもの大金を手にするものが出現した。貧富の差は益々大きくなっている。

こどもたちのチカラに嬉しさと驚きを感じる一方で、たくましさにも頭を悩まされる。

起こした会社の資金を私的に流用し、わざと赤字をしてマイナス決算で納税を逃れようとする、悪知恵を働かせるこどもが出始めたのだ。

いいよいよ、複雑な制度の抜け道を通ることもに対しどのように対処するのかこどもたち自身に考えてもらうときがきている。

つながりから始まる変化への期待

8月14日（日）に神奈川県横浜市で、「ミニココ・アートビレッジ&ヒ・19シンポジウム」が開催され、仙台のこどものまち、ミニいちかわ、ダガネランド（名古屋）、ミニヨコハマシティ、ミニ☆大阪、とさっ子タウン、イツツアスマールC-BT（千葉）、エンジョイスマイルさがみ（相模原）のこどものまちから、参加しているこどもや青少年たちが一堂に会した。

れている。これまでも、学生実行委員として参加した者が、卒業して高知を離れても開催当日に手伝いに来てくれる事例はあったが、今回は、こどものまちに興味を持つた愛媛大学や早稲田大学から多くの学生が来場し、準備期間から参加してくれた。来年度の参加を表明している学生もあり、その後、メーリングリストを通じて意見交換を行うなど、大学生の輪の広がりは継続されている。



愛媛大学、早稲田大学の当日スタッフと一緒に実行委員の記念撮影

えぬひい Oh!

また、同21日（土）・22日（日）には、京都市で「ミニ二京都」が開催され、とさつ子タウンからは、片岡優斗市長をはじめ7名の実行委員が参加した。片岡市長は、ミニ京都のこどものまちの「ホテル」で働き、神奈川県から参加した井出君と友人になるなど、他のこどものまちを知ることにより、とさつ子タウンの良さを改めて実感したそうだ。

市長や実行委員のこうした事業への参加を通じて、それぞれのこどものまちの情報交換がなされ、交流が深まれば、とさつ子タウンにきっと新たな変化が生まれるものと考えられる。

9月11日（日）には、第2回に引き続き、大橋通商店街で、「こどものまちの通貨」「トス」を商店街の地域通貨「る

シンポジウムでは、「こどものまちに関わってからの自分の変化」「こどものまち、こどもの活動での大人との関係」「どんな社会にしたいか」などが話し合われた。こどものまちに関わった自分の変化については、「積極的になった」「何事にも楽しみながら取り組めるようになつた」「他人の意見を聞けたり、全体を見通して自分の仕事ができるようになった」「自分の想いを自分の言葉で伝えられるようになった」などの共通する意見が出され、「学校以外の友達がたくさんできて、学校ではできない体験ができ、それが人生の役に立っている」といった報告もあった。



ホテルで働くとさつこ市長（ミニ京都新聞から）

全国のこどものまち 特徴あるこどものまちのひろがり

こどものまちは、北は札幌から南は高知まで多くの都市で開催されている。

ミニさっぽろは、見本市展示場を会場に、札幌市、同市民憲章推進会議、同商工会議所や産業教育系の財団法人が実行委員会を形成し開催しており、子どもたちが職業体験や消費体験を通して、働くことの楽しさや大変さを身をもって経験し、社会の仕組みを学んでいくイベントと位置づけられている。また、こどものまちの仕事は参加企業がサポートするため本格的な内容になつてゐる。

千葉県柏市のピノキオマルシェは、イタリア人アーティストであるエトアルド・マラジジが提唱した子どもが試行錯誤と実践を繰り返し、さまざまな学びの機会に触れるプログラムで、「子どもは街で育てよう」をコンセプトに2007年からスタートした。会場は、柏の葉キャンパス駅やショッピングパークなどで、企業やNPOによる実行委員会が主催となり開催されている。



”遊び“でもこどもの仕事として給料がもらえる
(ミニさくら 2002から...
「NPO子どものまち」中村桃子氏提供)

全国的には、どちらかといふとこどものまちに開わるNPO団体が開催母体となつてゐるところが多く、こどもに関わる他の事業との関係や一年を通じて継続性を持つた取り組みが出来ていたり、「あそびのまち」としての側面

んだ」と交換して実際の街で使える事業が行われた。大橋通商店街が主催する「るんだ商店街」とのつながりも期待したい。



実際の街で使うために「トス」を「るんだ」に交換するこどもたち（大橋通商店街）

が強いところもある。

現実の街とは異なる、こどものまちならではの独自の仕組みや遊びの要素を取り入れ、自ら遊びを考え、遊んだら地域通貨がもらえるなど、こどもたちの創造性を育みたいという狙いを持っているまちも多く見られる。

全国で40を超える地域で開催されているこどものまちだが、この事業に対する関心は高く、とさつ子タウンが始まつた2009年以降でも、さいたま市、富山市、相模原市、静岡市、岡山市、広島市などで新たなこどものまちが誕生しつつある。

今後、更に特徴あるこどものまちの広がりが期待される。

（森岡）

想いをつなげる Vol.2

～前に前に！成長する若者に迫る～

連載第二弾は前回に続き、学生の想いをつなぐ。今回は大学院を休学して、ばうむ合同会社で働いている井上将太さんに話を聞いた。

NPO活動を始めたきっかけ

井上さんがNPO活動を始めたのは大学に入つてから。それまではNPO活動などには全く興味がなく、高校時代からやっていたバスケットボールばかりしていた。きっかけとなつたのは大学1年生の時に友達に誘われた「いなかインターーンシップ（以下、いなかインターーン※1）」への参加。いなかインターーンについては、「話せば長くなる」と言うほど、井上さんがこの時の経験から得たものは大きい。



山に入って伐採見学

井上さんは森林学科ということもあり、嶺北の森昭木材でのいなかインターーンの中、SGEC森林認証（※2）の申請書類作成などを行つていた。そのため、木材の管理や製材の流れなどの林业の現場を見ることができる、いなかインターーンでの経験が大変楽しかったという。

いなかインターーンから得たもの

いなかインターーン終了時には、東京で行われた全国のインターーン経験者が集まる報告会に高知県代表として参加。300人の前でプレゼンテーションをするという経験と、様々な地域で活動する学生や社会人に出会い、刺激を受けた。また、報告会を通じて都会を知ることで、高知を客観的に見る機会になつたという。

いなかインターーンが終わつてからも受け入れ企業の社長さんから林业に対する熱い想いを受け、話をしていく中で、建築士の育成プログラムと建築の現場が切り離されているという点に着目し、建築士を目指す若者を対象にした「森の未来に出会い旅」というセミナーを企画。「5年で100人の応援団を作る」を合言葉に現在も続いている。

その他にも、子ども向けの体験教室を開くなど、林业を中心としたイベントを行い、大学の授業だけでは学ぶことができない、仕事としての責任の重さを学んだ。



環境教育のため小学校で授業をする井上さん

※1 いなかインターーンシップとは…

一般的に行われている、学生が、一定期間企業等の中で研修生として働き、自分の将来に関連のある就業体験を行えるインターーンシップ制度に、高知県ならではの地域性を加えたもの。

高知県嶺北地域で活躍する社会人と若者を結び、自ら仕事を創つている社会人（師匠）の元で、今までの産業に若者のクリエイティブな発想を加え、新しい仕事を創り出す。いなかから日本を変えていくチャレンジを目指している。

※2 SGEC森林認証とは…

SGEC森林認証システムは、日本の森林管理のレベルを向上し、豊かな自然環境と持続的な木材生産を両立する、健全な森林育成を保証するシステム。

審査の基本となる、7つの基準と35の指標で生物多様性など、森林の環境機能の維持及び森林の水土保全など森林の多面的機能の増進を図る。

井上さんは実家が建築関係ということもあり、建築とつながりの深い林业に軸を置いていた。大学4年になり就職を考えたとき、「林业」で検索すると大手企業しか出てこなかつたという。どちらかというと大企業は「システム化」というイメージがあり、地域に密着した中小企業と関わってきた井上さんは、就職ではなく自分で会社を経営することも考えた。

しかし、地域づくりやビジネスで課題を解決していくためには視野を広く持ち、他分野の知識も必要だと考え、

大学院へ進学することに。

【寄稿文】井上将太さん

(高知大学大学院生)

後輩につないでいきたい想い

日頃の思いを綴る

井上さんは、新しいことを始めるときは環境を変える

習慣があるという。大学院進学を機に環境を変えるため、嶺北地域への移住を決めた。移住先の嶺北地域は、いかインターんや森林環境税のシンポジウムで住んでいないにもかかわらず、地域の代表として選ばれるなど、縁の深い地域だった。

積極的に色々な人と会う機会を作り、人から人へつながりをどんどんと広げていった井上さん。全国各地から講演会やシンポジウムのパネラーとして呼ばれるなど、学生らしからぬ活動ぶりで全国の色々な人と出会ってきました。そんな人との出会いながら、仕事を任せられることも増え、現在は「井上地域づくり事務所」を立ち上げ、ビジネスを肌で学びながら実践している。

最後に、井上さんの考えるまちづくりに必要なことについて井上さんらしく、林業に例えて語ってくれた。

一つは、芽を育み、土づくりをしていくこと。出来る人が出来ることを出来るタイミングで地域や個人に対し支援を行い、まちづくりの基盤を作る。
もう一つは、木を植え、育てていくこと。継続性を持つて若者が事業を興し、運営していく。若者が知恵と行動力でどう地域を盛り立てていくかが課題であり、求められていると考えている。

高知県を代表する若者として、これからもたくさんの人出会い、知識や経験という肥料を蓄える。彼が育てる木はさらに大きな木に成長していくだろう。

(高知大学3年 大野悠里)

人との出会い

人との出会いとは人生の中で一番大切であり、一番大事なことであると思います。例えば明日1人の方と新たな出会いがあったとします。これが毎日続いても365日では365人の新たな出会いしかありません。20年間であっても365人×20年=7300人、60年であれば21900人となります。



一番伝えたいことは自ら考えながら覚悟を持ち、前に前に進んでもらいたいということです。確かに世の中の流れに乗っていくことは大事なのですが、それは自分で考えた結果でなければいけません。あまり時間のない人生の中で自分のやりたいことをやり、充実して生きていこうこと。このような生き方をしてもらいたいと思います。やりたいことがないのであっても考えて考えて考え方抜けば必ず自分の役割が見えてくると思います。私もまだ自分の役割が明確に見えているわけではありませんが、常に考え方行動する習慣はついているつもりです。それに大学生活は人生の中でも本当に自由な時間であると思いますし、色々なことを学び吸収して生活をしてもらいたいと思います。



サポートセンター事業の あ・れ・こ・れ

第13回市民がつくる防災フォーラム ~津波から命を守るために~

今年度は、「東日本大震災」を大きなテーマに、南海地震から自らの命と家族をどのようにすれば守れるか、市民の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。お説明の上、ご参加ください。

●●●防災体験展示コーナー●●●

- 12:00～13:00 乳幼児の救命救急講座
- 12:00～15:00 市販のもの以外でできる家具の転倒防止法
出入り自由
 - 100円ショップで買える防災グッズ展示
 - 心肺蘇生法（乳児～大人）& AED紹介 etc...
- 14:30～15:00 飛散防止フィルムを貼ったガラスと貼っていないガラスの破損実験
- 非常食試食



参加費無料
当日参加OK!

日時 12月18日(日) 12:00～16:30

★託児（未就学児）の必要な方は、12月12日(月)までにお申し込みください。

場所 こうち男女共同参画センター「ソーレ」（高知市旭町3丁目115番地）

お問合せ・お申込み先 高知市市民活動サポートセンター 担当：又川

TEL: 088-820-1540 FAX: 088-820-1665 E-mail: npojm2@siminkaigi.com

●●●大会議室での催し●●●

- 12:00 開場
- 13:00 開会挨拶 要約筆記・手話（13:00～16:30）
講演
東日本大震災に学んで南海地震に備える
講師 大年 邦雄氏（高知大学 農学部教授）
… 質疑応答（15分）
- 14:30 休憩
- 15:00 防災サロン「気になるテーマで井戸端会議」
 - 知りたいチーム（津波・避難）
 - 聞きたいチーム（自主防災会）
 - 言いたいチーム（防災自治を考える）
- 16:00 講評 大年 邦雄氏
- 16:20 閉会挨拶



公益信託高知市まちづくりファン

～2010年度最終（ハード）・2011年度中間（ソフト）発表会&2011年度第2次公開審査会（ハード）～

公益信託高知市まちづくりファンは、まちづくり活動団体への助成を目的に高知市が四国銀行に3,000万円を出捐（しゅつえん）して創設。助成先は公開審査会で決定し、透明性の確保とともに、交流やまちづくりの学びの場として、高知市市民活動サポートセンターが運営のお手伝いをしています。

1月28日（土）の最終・中間発表会では、2010年度「まちづくり大きな一歩」コース助成を受けた1団体が最終発表を、2011年度「まちづくり一歩前へ」コース助成を受けた5団体が事業の進捗状況を発表します。1月29日（日）の第2次公開審査会では、7月の公開審査会で1次審査を通過した1団体が事業内容を発表し、助成が決まります。市民活動をしている方、興味のある方の参加をお待ちしております。

日時 2012年1月28日（土）29日（日）13:30～17:00（予定）

場所 高知市たかじょう庁舎6階大会議室（高知市鷹匠町2丁目1番43号）

お問い合わせ TEL: 088-820-1540 E-mail: npojm4@siminkaigi.com



2010年度第2次公開審査会の様子

編集スタッフの



つぶやき

@たまき



マラソン大会に出てみたいと、休日の朝、ウォーキングを始めてます。先日、「限界まで走ってみよう。」と試してみたところ、2分で限界でした。がんばろう。

@青木



ノンアルコール飲料市場が活発です。我が家家の空き缶分類によると、ノンアル6割、発泡酒3割、その他1割。先日、「ノンアルチューハイ」のCMを見て旦那が一言、「ファンタじゃいかんか？」。確かに。

@のむ



想定外のことに遭遇した時、人の心は？人はどう行動する？ここそこ、いろんな想定外に遭遇し、暫くドッキ～何で～のままだった私。あなたは？

@ありた 高知大3年



10月に入り、すっかり寒くなりましたね。先日、彼女の誕生日に見栄を張り過ぎたおかげで、私の財布も気温とともに一気に冷え込みました。就職試験が迫ってアルバイトの回数も減り、今年の冬は長引きそうです。

えぬひい！Oh!

発行

高知市市民活動サポートセンター

企画編集

特定非営利活動法人

NPO高知市民会議 広報部会

〒780-0862 高知市鷹匠町2丁目1-43

高知市たかじょう庁舎2階

月～金／10:00～21:00 土／10:00～18:00（日・祝日は休み）

TEL: 088-820-1540 FAX: 088-820-1665

E-Mail: npokochi@siminkaigi.com

<http://www.kochi-saposen.net/>

この冊子は再生紙を使用しています